

もとおさと  
本御内遺跡（舞鶴城跡）  
（国分市中央2丁目）

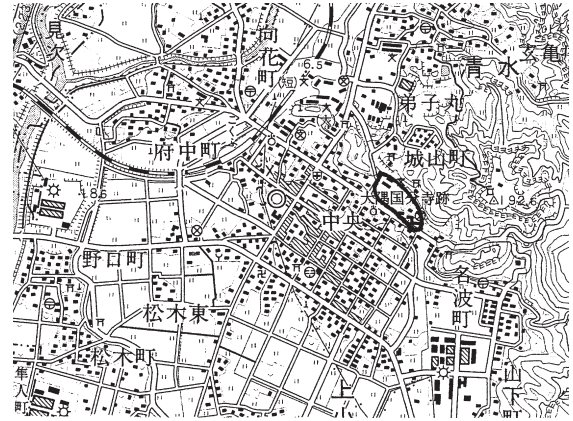
### 位置と環境

遺跡は国分市の城山の西南麓にあり、現在県立国分高校及び国分市立国分小学校となっている。遺跡の東、北は城山に囲まれ、南、西に開けたほぼ平坦な地勢で、標高は10m前後である。

国分市は旧大隅国の中心地であり、数多くの遺跡・史跡が点在している。縄文時代の上野原遺跡のほか、古代から近世にかけての史跡も数多い。古式土師器が出土したことで著名な城山山頂遺跡は本遺跡背後の城山の山頂にある遺跡である。

古代においては、713年に日向国から大隅国が分置されたさい、国府・国分寺・国分尼寺が建立され、大隅国の中心地として栄えた。国指定史跡大隅国分寺跡は本遺跡の西約300mの位置にある。

近世においては、本遺跡の発掘調査の端緒となった国分舞鶴城が慶長9年（1604年）島津義久によって築城されており、埋もれていた遺構の一部が調査で確認された。現在の国分市街地の町割りはこの舞鶴城築城時に行われており、国分寺などが存在していたころの条理が作り替えられたと考えられている。条理遺構は現在京セラ国分工場がたっている名波町

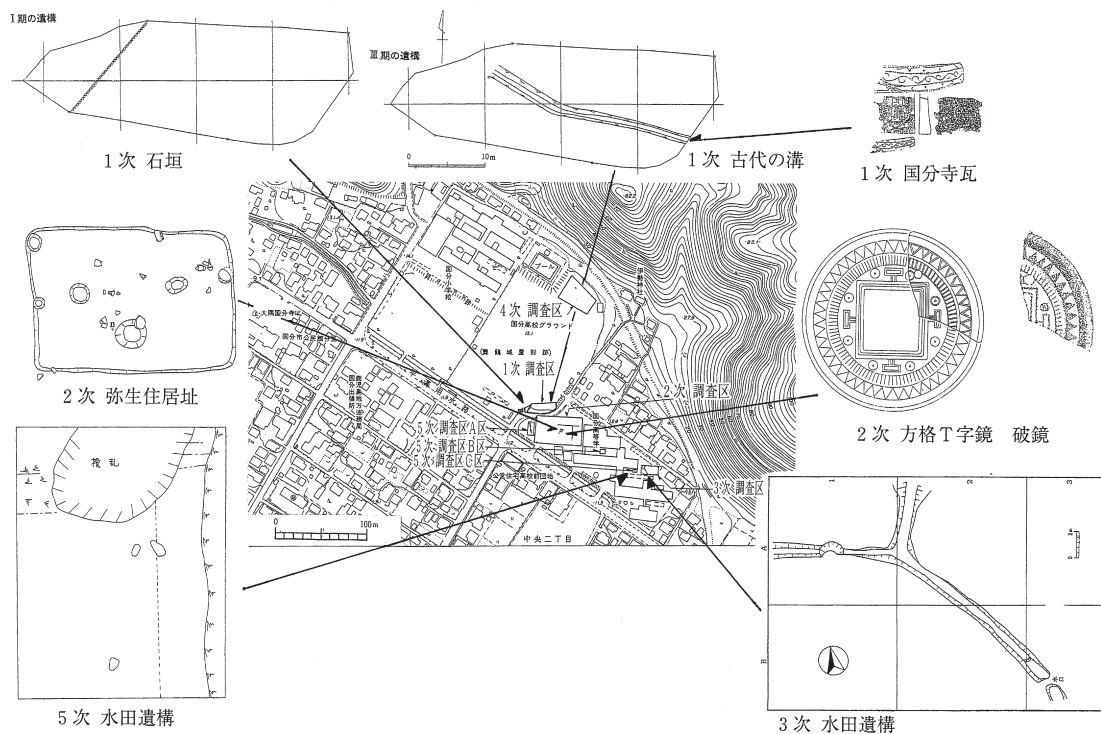


第1図 本御内遺跡の位置

に昭和40年頃まで残っていたようである。発掘調査では、この条理遺構の一部かと推定できる遺構も検出された。

### 調査の経緯

本遺跡の発掘調査は、県立国分高校の諸施設建て替え及び新設がきっかけとなって実施されてきた。平成4年度には体育館建て替えに伴う市道付け替え部分の調査が、平成5年度には体育館建て替え部分の調査が実施され、これが第1次・第2次調査となる。その後、平成6年には、国分高校に理数科が新設されることとなり、その校舎新設に伴う調査（第3次調査）が実施され、平成8年にプール及び弓道



第2図 本御内遺跡1～5次の概要図

場建て替えに伴う調査（第4次調査）、平成11年度に汚水処理槽新設に伴う調査（第5次調査）が実施されてきた。足掛け8年、5次に及ぶ調査が行われ、重要な遺構・遺物が発見された。なお、第2次調査の平成5年は、8・1災害があった年である。

### 遺構と遺物

舞鶴城関連の遺構としては、大手に通じる五間道路とその東側の石垣が第1次調査で検出された。「国分諸古記」に見られる「御犬垣跡、当分衆中屋敷」を区画する石垣であり、切石の布積みであった。この遺構の発見で「国分諸古記」の絵図が正確であるのが実証された。ただし、後世の工事のためか、最下部の1～2段しか残っていなかった。また石垣内部の遺構は全く残っておらず、「御犬垣」や「衆中屋敷」の様子は全く分からなかった。屋形跡である国分小学校敷地の南側に残っている石垣は自然石の乱積みであり、これとは異なっているのが、屋形とそれ以外の施設との違いを示しており、興味深い。この時期の遺物は薩摩焼や伊万里焼などの陶磁器と舞鶴城屋形などに使われていたであろう近世瓦である。特筆されるような物は見つかっていない。

中世の遺構は、1次、2次、3次、5次調査で水田跡が検出されている。このうち、2次・5次調査で検出された水田跡の畦畔は真北方向になっており、条理遺構ではないかと考えられる。この方向は、現在の国分高校周辺の街路の方向と斜めになることから、現在の町割りが舞鶴城築城時のものと言われているのと矛盾しない。畦畔に接する溝も検出されたが、発掘区の縁にかかっていたため幅や深さは不明である。また、5次調査ではシルト層を剥いで水田面を出したときに足跡のようなくぼみが2個検出された。この時期の遺物としては大量の青磁・白磁が出土しているが、これと関連しそうな遺構が見つかっていない。唯一確認できたのは、第5次調査の土層断面で見つかった掘立柱建物の柱穴だけである。なお、出土した青磁や白磁は中国の江南地方にあった同定窯や竜泉窯、景德鎮窯で焼かれたもので、12世紀後半～13世紀のものと、14世紀～16世紀前半のもので、この時期に中国から輸入されたものである。

古代の遺構は真北と直交する東西方向に走るV字溝が検出された。溝の中から国分寺跡で出土したのと同じ布目瓦や唐草紋の瓦が出土したことから国分寺と関連のある溝だと考えられる。国分寺跡から約

300mと離れているのが若干気になるが、寺域を区画する溝ではないであろうが、溝の方向や中から出土した遺物から見ても、国分寺との関連は疑いようがない。中からは大量の国分寺瓦と土師器が検出された。

古墳時代の層からは自然流路が見つかっており、その中や周辺から大量の成川式土器が見つまっている。住居跡は発見されなかったものの、完形に近い破片が多いことや大量であることから、近くに住居跡があったであろうことは容易に想像される。また、ミニチュア土器も多かったのが特徴であり、ミニチュア土器は祭祀に用いられた土器と言われているが、そうであるならば、何らかの祭祀遺構もこれまでの発掘区の外に存在するであろうと予測される。

弥生時代の遺構・遺物は住居跡1軒とその周辺から、破鏡1点と東九州の安国寺式土器や南九州の山ノ口式土器が出土している。住居跡は2.6m×3.5mで、単独に1軒だけの出土というのが興味深い。破鏡は方格T字鏡を割って、その割れ目を磨き、紐を通す穴を空けたものである。推定復元径は14cm、外縁はほぼ14を残すが中心部は残っていない。一般的に破鏡は権威のシンボルとして分与されたものと言われるが、どのような人から、この地域の有力者に与えられたのか。また、この地域の有力者とはどんな人だったのか。そしてまた、なぜここに残されていたのか。東九州の土器と一緒に出土したことと併せ、新たな課題が出た遺跡である。

### 特徴

方格T字鏡の破鏡は本県唯一の資料である。また、古代・中世の水田の検出例としても貴重である。

### 資料の所在

出土遺物は、県立埋蔵文化財センターに保管されている。

### 参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター1994「本御内遺跡（舞鶴城）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書』12

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002「本御内遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書』45

（富田逸郎）